訪問の遲延したことを詫びたのであるが、固より磊落な大佐は、其樣ことに拘わらふべき筈はなく、談話は何時か出張中のことに移つて、高村は長崎滯在中の模樣から、花の季節に近づいた京大阪の景況など、大佐に問はれる儘を答へて居たが、其中不審國府津で絹子に出合つたこと、大船で別懇らしい若い男が同じ車室へ乘込んで、絹子と馴々しく話したことなど思起して、厭な氣持になつた。で、浦波のことは拔いて、絹子と同車して歸京した顚末だけを、搔摘んで話したが、大佐は最うそれを知つて居た。

「うむ、然うだとか云ふ話だので絹子さんも一人旅で寂しかつたらうし、恰ど好却合であつた、何うかな、其後名和へも行かんかい……。」

「何うも今お話した通り忙かしいものですから、つい未だ其儘にしてあります、何れ近い内には是非尋ぬやうと思つて居るですが……。」

「まあ可い、何も然う急ぐにも當らんがの。」

大佐は恁う云つて、膳の上の盃を舐めるやうに一口飲んで、

「時に君は何か？、絹子さんが熱海から歸つて來た事情を知つとるかの……」

「歸つて來た事情、」といふ言葉は妙に高村の胸深く響いた。それと同時に絹子の態度甚だ冷淡であつたことなど思出されて、それが何か自分に關係ありとは早くも推したが、何う云ふ事であるのか、判斷は付かぬ。唯漠然と何か自分に關した問題だなと思はれたので。

「否、まだ存じません」と答へる。

「然うか」大佐は暫く默つて居た。

「で、何かの、君と同車中、絹子さんの態度は甚麽ぢやつたの……」

「甚麽かと申しますと？」

一種の不安が高村の胸に湧く。彼は熱と考へた。

「はゝゝゝ何も然う難かしく考へる事はない、唯、何時ものやうに嬉しい顏も見せなかつたらうと云ふことぢや」

事も無げに言ひ放つて、大佐は高笑する。
「御冗談なんですか」飜弄されたものと思つて、稍氣耻かし氣に、
「僕は又本當のお話しかと思つて謹聽して居つたのです」
「いや、冗談ではない……實は今夜來たのもそれが主なる用件での。」と、大佐は眞面目らしくなつて、
「喃君、絹子さんが飛んでも無いことを聞出したのぢや」
「飛んでも無いことゝは？……。」
「ほら、何時やら私も見たと云つた……例の、何とか云つた……」
目を瞑つて記憶を辿りつゝある大佐の顏を睨々と見戍りながら、高村は片唾を呑んだ。
「うむ、然うぢや、秀香女史？然う〳〵」と、大聲に言つて、
「那の女は確か君の幼友達だとか云うたの、那れをなあ君、到頭絹子さんが嗅ぎつけたのぢや、で、何う云ふ事情があるのか、それを君に聞正して呉れいと

云うて……いやはや、媒酌人なんと云ふものは面倒な役目ぢや。
「然うしますと絹子さんが、究り僕を不品行のやうに疑つて居るといふのですな。」
「まあ那樣ものぢや。」
大佐は、捨るやうに云つて、言葉と共に箸を執つと、鮪の刺身をムシャ〳〵と口の中に頰張る。
「はゝあ、然う然うですか。」
高村は胸の裡で樣々なことを考へた、自分は實は大船で同車した男に就いて內心大に疑を抱いて居る。絹子は自分と碌々口も利かぬのに、其男とは幾度か話し合ふて居た、自分には何となく冷淡であつたが、其男には愛想よく應對つて居た。假りにも末を契つた所夫の手前もあるでは無いか、怒らば怒るべき價値がある、責むれは責むべき理由はある、併し自分は男として其樣ことを騷ぎ立てるのを耻かしいと思つて居た、不快には感じたものゝ、其疑團が他日嫌て氷

解せらるゝことを期して居る、自分は絹子に對して恁くまでも寛大であつた、にも關らず絹子は何處から聞き嗅つて來たのか知らぬけれど、自分と秀香のことを云々して……しかも、それを自分に對する態度にまで示すとは、實に見下げ果てた根性である、が、絹子は何處から其樣ことを聞き出したのであらう……。」

其話說の出處を色々と思索して見たが、何うしても高村には見當がつかぬ。で、大佐に對して、

「絹子さんは一体、何處から其樣ことを聞いたのでせう？」と、聞いて見る。

「それか、それは新聞へ出たからぢや、遂比四五日前の東京新報とかへな、秀香女史の名も君の名も歷々と出て居つたさうぢや。」

「新聞へ出ました！然うでしたか僕の名迄……。」高村は愕然としたらしく眼を瞬々させながら、

「僕は些少も知らなかつたです、一体其新聞には甚麼ことが書いてあつたのですか。」

「何アに根も葉も無い惡口に過ぎんのさ、私は讀んで見ないが、何でもハガキ集とか云ふやうな所に出て居つたのださうで……」

「誰か惡戯したのでせう」

其樣ことならば、何も大して自分の名譽に障るほどの事でも無いと、高村も稍心が落付いた。

「絹子さんはそれを確かめて何うすると云ふのでせう。」

「さあ、其處迄は能くも聞かなかつたがの、左に右其實否を質してくれいと云ふのぢや、疾しい事は無いだらうの。」

「勿論ですとも！」決然と云放つ。

「宜しい、それで充分ぢや、後は私から可いやうに宥めて置かうで……併し高村君、其秀香女史とやらの關係も何とか方法をつけて置かんと、早晩又悶着が起るかも知れんからの、世間は實に煩さいものだ」

「はあ、承知しました、彼方へは貴君から然るべく御辨解を願ひます。左も右も折角結びかゝつた關係ですから、僕も些細なことで破りたくもありませんし……。」

實は自分も絹子に對して疑團があるのだがと、大船の咄を持出さうとしたが、又思ひ返して其儘口を噤んで了ふ。

絹子の話しはそれ限り消えて、盃を持ち續けの大佐は高村を對手に機嫌よく、例に依つて米國艦隊の回航とか、英獨海軍の比較とか、其樣時事問題を捉へて、盛んに氣焔を吐きながら、夜更くる迄も飲み續けた。

(三十一)

絹子が熱海へ行つた後、日數は未だ二週間にもならぬけれど、浦波は一月も二月も逢はぬやうに思はれて、早く歸つて來れば宜い、歸つて來て、其美くしい顏を見せれば宜いと、其樣ことばかし考へて居たので。

其處へ突然に絹子が戻つたから、もう矢も楯も堪らなくなつてゐる、それには例の秀香の一條と云ふ訪問の材料もある、で、早速訪ねやうと思ひながらも、有繁に氣の咎めることもあつて、不知二日三日と延び〳〵に過ぎたが、今日は最う堪え切れなく、社の方へは例に依つて他用を託つけ、昼飯を喰べると、直ぐ、毎もの背度服で名和家を訪れた。

絹子は宅に居た、彼は待兼ねて居たやうに浦波を出迎へて、自から其居間へと導き、茶よ菓子よと、饗應しながら、話頭は先づ不在中の東京の模樣に始まつたが、浦波は絹子が留守中に出版された著作家の小說の畧筋や批評やら、替り狂言の面白い點など、平常絹子が好んで居る話を、それからそれと持懸けるので、絹子は、艶やかな其顏に、嬉しさうな笑を浮めながら、恍惚となつて聞いて居たが、纏て思出したやうに眼を瞪つて、語調を改め、

「それはさうと、浦波さん、先達てお手紙を頂きました那のことですが……那れは貴君眞實なのでせうね。」

「勿論です、若しも那の手紙に就いて、貴女が御疑念を懐かれるやうなことがあると、私は……殘念に思ふのです」

「いゝえ、疑ふの何のと、其樣ことは無いのですが……」

「や、分りました、と、貴女は一歩進んで其新聞の材料の出處をお聞きになりたいと有仰るのでせう、それは至極御尤ものことです……那の手紙を差上げる迄には、無論相應の調査もして見ましたし、進んでは其對手の秀香女史に面會して迄、其虚實を驗した位なので……。」

「まあ、貴君秀香女史とかにお會ひになりまして？」

「えゝ、會つたです、會つてそれとなく樣子を探つて見ましたで、這麼ことを……現に貴女が未來を托されやうとする方の事に就て、彼是と申すのも心苦しいですが、其時の口吻、態度、其他種々なる點を綜合して見ますと確かに事實と認めらるのですが……。」

浦波は得意顔に絹子を見る。

「然うですかね。」と、絹子は落付かぬやうな眼付をしながら、稍惟き加減になつて、凝と耳を傾けて居る。

「實は此件を貴女にお知らせする可否を考へたですが、事實は過ぎ去つて了つた事ではなく、今現に活きて居るのですから、放つて置けば、比先何うなるか知らんと思つて、手紙にも申上げた通り友人の義務として私はその……」

「本當に御親切にお知らせ下すつて……。」

此時高村と秀香の關係を、それとなく胸の程に描いた絹子は人知れぬ嫉妬ましさ、口惜しさを感じたのである。

秀香の姿は、何日ぞや明治座の演藝會の折に見知つて居る、一種人を魅するやうな婀娜たる其容姿、聞いてゐる人の胸を搔搖るやうな艶を含んだ其音聲、一座聽衆の心膽を奪つて、滿堂の祝聽を、一身に集めた其妙技、乃至拍手の響も、賞讃の聲も……其時の光景は今目前に見える、那の美しい、秀香が高村を迷はして居るのか、高村が自分に見替へた其女は那の秀香であつたのか、自分は

今日迄……敢て誇りは爲なかつたが、他の女に對して、決して負けを取るなど、丶は考へなかつた、それが今秀香の爲めに美事超落された、高が賤しい藝人風情の者から、恁うした耻辱を受けるとは、心外である。殘念である。無念である。それは迷うた高村も惡からうけれど、それよりは迷はした秀香の方が寧そ惡くて〳〵ならぬ、悔しい、殘念だ、何うかして敵を討つてやりたい……。」

包まうとしても、自から現はれる胸の炎！、溺充血した目に男を見て、

「浦波さん、妾、もう覺悟して居てよ、何うせ那樣心の腐つてゐる高村など丶無理やりに一緒になつた所で、何の面白いことがありませう、高村だつて那樣に秀香女史が好いならば、其女と同棲になつた方が却つて滿足でせうから妾はもう何うせ捨てられた身體なら、此儘一生獨身で暮しませう寧そ田舍の學校の教師にでもなつて……。」

聲曇らせたが、耐へかねて手巾で顏を掩ふた、寂しい孤獨の生涯が、幻影の如く胸を襲ふて、悔しい、嫉ましいの一心に、今迄張りつめて居た氣が緩んだ。と、

急に悲哀と絶望の涙が熱湯の如く頰に溢れる。

浦波は氣の毒さうに其姿を見遣つて。

「然うまで御考へなさる程のことも無いでせうが……。」

「いゝえ、妾もう覺悟して居ますから……」と、絹子は涙に潤んだ眼を拭ひながら、

「若しも然うなりましたら猶のこと、何うぞ一層御親密にして下さいね、妾のやうな便無いものは、貴君のやうな方に力となつて頂きませんとねえ……」

言半して凝とばかり浦波を見た。

痛々しい迄に思ひ惱んだ其風情を見ると、浦波はいとゞ、猶同情の念が起る。

可矣、何處までも絹子の爲めに力にならうと、咄嗟の間にもそれと決した。併し絹子が斯く迄に自分を信賴して呉れるのかと思ふと、心の底から云ひ知れぬ嬉しさ辱なさが泉の如く胸に湧く。

「私のやうなもので宜しいなら、それは盡します、何處までも貴女の爲めに盡

します。」

辛くも恁う云ひ得たが、血が上つて頭の中がぐらつくやうに感じたのである。

「何うぞお願ひしますから……」と、絹子は伏目勝になつて涕を啼つた。

「併し絹子さん。」と、稍落付いたらしい調子で、其樣に心配することも無いでせう。恐らく何とか解決が付くでせう、何も獨身の何のと有仰らなくとも、高村さんも豈か然う何時まで迷つては居られまいし……。」

其儘口を噤んで、眼を瞑る。

二人が間の惡しき感情も何時かは消えて、いづれ樂しく語るべき機會もあらう今の悲しみを笑顔の中に語るべき時が來やう、絹子は何も然う心配するには當らぬのだ、が、然し其時自分は何うなることだらう、高村と絹子が互に再び手を握り合つた時分に全く除外者にされて了まつて、一人法師の寂しい境涯から二人の睦まじい樣を眺めねばならぬやうになる、然う思ふと二人の交情の回復は望ましくない、絹子を悲境に落すのは忍びぬけれど、自分は何處迄も其信頼

者の地位に居たい……。

然う思ひながら浦波は、俯いて居る絹子を見たが、細そりとした頸のあたり、得も言はれぬ懐かしい香がして、襦袢の半襟の派手な秋草模樣も映り好く、撫肩の娉婷とした着物の着態、浦波は不思議に胸がドキ〳〵して、我ともなく悦惚となる。

(三十二)

水田大佐が訪ねて來た其翌日は恰ど土曜日であつた。高村は何日も居殘りで用務の進行を計つて居るのだが、今日は奇らしく早退が出來たので、不圖思ひ立つて名和家へ寄る事にした。

取次の話に依ると、主夫婦は何か用事が出來て、正午過横濱の方へ出掛けたと云ふ。

で、高村は玄關に佇ずんだ儘、兩手を後に廻して短劍の柄を手弄りつゝ、女中

對手に色々のことを話して居たが、折角來たものを此儘歸るのもと、
「絹子さんはお居でだらうな。」と、訊いて見る。
「えゝ被居います。」
「では僕が來たと、さう云つて呉れ。」
「は、一寸御待を……。」
上らうとする高村を女中は押止めるやうな素振をして、慌だし氣に奥へ行かうとした。
「や、云はんでも宜しい……」と、高村は蹤々と板敷の上に昇らうとすると、女中は又立止まつて高村の行手を遮り、
「何うぞ暫らくお待ち下さいまし、謝るやうに云ふ。
怫然とした高村の樣子に、女は困つたらしく、
只今御客樣がお有りなさいますから、一寸伺ひまして……。」
「うむ、然うか。」

暫く待つたけれど女中は來ぬ。
先刻の態度と云ひ、今又直ぐに出て來ぬところを見ると、或は絹子が自分に面會するのを望まないのではなからうか、望まぬならば望まぬで宜い、自分は何も強ひて面會せねばならぬ必要も無いが、併し絹子に然ういふ意志があるとすれば、實に此上もなく自分を侮辱したものだ、自分は今絹子に對して、其誤解を訂さう爲めに來たのであるが。若しも絹子に融和すべき意志が無いならば、それも無駄なことである、此場合無理に會ふよりも、寧そ歸らうか、然しそれも餘り憶側に過ぎは爲ぬか、女中も現に來客があると云つてゐた、五分や十分待遇つて呉れぬからと云つて、氣短かに歸らうと思ふなどは、稍神經過敏だ、輕卒だ……
我と我が心を嘲りつゝ、高村は足を止めて、門外を往來する人の影など眺めて居たが、不圖玄關前の敷石へ視線を移すと、何時の間に來たのか、其處に大きな瓜色の洋犬が、高村を見て、嬉しさうに尾を振つて居る。

「おゝチョン！」と、犬好きな高村は、上口の板敷へ下りて、擦り寄つて來る犬の頭を撫でゝ遣ると、犬は甘えるやうに其手に絡みついて、大きな舌で、ペロリ〳〵と手の甲を舐める。

「こら、止さんか。」其手を引くと、犬は踞を窺つて、屈曲んで居る高村の頰のあたりをペロリと遣る。

「こらッ。」——、高村は我知らず一喝したが、犬は其聲に駭いて、早くも一二間先へと逃げ延びて、首を傾げながら凝と高村の顏を眺めてゐる。

「舐め居つたな！」笑顏で睨付けて衣兜から手巾を取り出し、舐められたところを拭いてゐると、犬は又戯れかゝるやうな氣勢を見せる。

「あはゝゝゝ、其滑稽けた姿に、高村は我知らず笑つたが、奥から誰か出て來たので、高村は振返つて見ると、洋服姿の若い男が此方へ來る——流車中に見た其男と、氣が付くと、何とも云へぬ厭な顏付になる。

浦波は女中が直して呉れた黄皮の靴を履きながら、それとなしに高村の態度を見遣つたが、聽て靴を履いて了ふと、一寸女中に會釋して跛蹠と出て行く。

と、女中は高村の前に丁寧に腰を曲めて、

「何うもお待たせ致して濟みません、さあ何うぞ此方へ……。」

勝手を知つた其部屋へ通つたが、絹子は何處へ行つたのか姿は見えぬ。然うして呑みさしの茶碗や菓子皿が。片隅に押寄せてあるのは、今まで那の男と話合つて居たのであらう、自分を差置いて、仇し男を引入れるとは、何たる不謹愼のことであらうと、先刻から重ね〳〵不愉快なことばかしなので、高村は女中が薦めた座蒲團へ腰を下ろすと、腕を拱いて凝と考へ始める。

自分が長崎へ出發する前夜、絹子が訪ねて來たのは僅かに二週間前である、其時自分は何う云ふものか、非常に絹子に情を引かれた、長崎に滯在中も始終絹子のことばかり考へて居た、それまで左のみとは思はなかつた絹子の懐かしさが、漫々と偲ばれて、それを妻とする自分の光榮をも喜んだ、秀香に比較しては遙に品もあり美しくもある絹子は、行末自分に嫁付いて、滿腔の愛情を傾け

てくれるかと思つた時、云はうやうない樂しさを覺えた、それが二週間後の今は何うであらう、自分のものとばかり信じて居た絹子は、些細な自分の欠點を捉へて自分を攻擊しながら、已は却つて仇し男を引ずり込んで樂んで居る、不都合至極とも、不埒千萬とも、絹子の心はもう大底分つた、彼女は自分の美貌を鼻にかけて、他くまでも自分を弄ばうとして居るのだ、甚麼ことがあつても自分は彼女を捨て得ぬやうに、考へて居るのだらう、實に人を侮辱したものだ！今迄は水田大佐の口添もあればと、多少の不滿は强ひて抑へて居たものの、今はもう忍んで居べき場合で無い、可美、今日こそは那の怪しい男、間紀して、大に彼女の不所存を攻めてやらう、自分は今日我身の辨解の爲めに訪ねて來たが、それよりも先づ……。

高村は熱した頬を手巾で拭く。塗端に、樣側の障子が開いてひよツこり首を出した者がある。それは茶を運んで來た女中であつた、絹子は何うしたのか、まだ顏も見せないのである。

（三十三）

あと三日で最う今年も四月になる、櫻は未だ咲かないが、世間は大分春めいて來た。

場末の内でも寂しい宮村町の裏通り、何時も夜は森閑として、道行く人の足音さへ碌々聞えぬ程であるが有繋に此日頃は然うでもなく、折々女連の話ながら行くのもあれば、湯歸りの職人の陽氣な鼻唄、物賣りの聲なども折々は聞かれるやうな時候になつた、

秀香は此四五日來風邪の氣味で、招かれる演席も渾て斷り、夜は早くから臥せるやうにしてゐたが、今宵は思の外暖かいやうだし、それに大分氣分が可いらしいので、縫ひかけたまゝ擲つてあつた肌着を取出したが、針の運びは兎角鈍り勝で、高村の事、例の新聞の事、自分の將來の事など、繰返されて、唯心寂しく滅入るやうに成つて來る、時計を見ると最う八時過、無理に仕事などして

また重り返すやうでは大變だと、半襟を着けるばかりになつた、肌着を、其儘壁
み込んで戸棚へ仕舞ひ、雨戸を閉てやうと、思つて、障子を開けた。
戸外は眞の闇夜、風はそよとも無く、水蒸氣を籠めた夜の空氣は濕とりとして
觸れば手が濡れさうに思はれる、何處の家か、面白さうに、旋ては苦しさうに
笑ふ女の聲がするので、秀香は窓の椽に凭りながら、聞くともなく耳を傾けつ
ゝ、嚙然として考へて居たが、遠く俥の音が聞えて、漸くそれが近付くと、家
の前で、ぴッタリ停る。
「此家樣で……。」と、車夫が轅を下ろすと、續いて和服に鳥打帽子を冠つた
一人の男が蹶込を下りた。
車夫の翳した提灯の火影に、男は叟々と蝦蟆口の金を數へて車夫に渡すと、
「何うも難有う御座います。」幾度か腰を屈めて、聽て轅を上げ、元來た道の方
へ戻つて行く。と、男は暫らく其後影を見送つて居たが、蹤々と、階下の入口
の方へと歩み寄つた。

内部から射す燈火の影に朦朧ながら其姿が映つると、秀香は不圖それが高村で
は無いかと思つた、併し高村は今現に長崎へ出張中である。今頃來やう筈は無
い。「誰だらう？」と口の裡で呟きながら、階下の樣子に耳を澄す。
間もなく格子戸の開く音がして、鈴の音が氣立ましく鳴り響く、と、奥から主
婦が出て來たらしく、何やら話合つて居たが、聽て階子段の上り口から、主婦
の聲で「青柳さん、お客樣ですよ。」と、叫ぶのが聞えた。
扨ては猶且高村であつたのか。二月位滯在すると云つて居たのに、何うして今
頃歸つたのであらう、然かも何日もは手紙で呼びに寄來すのに、今夜に限つて
訪ねて來るとは、何うしたことかと、秀香は身繕ひしながら下へ降りやうと爲
ると、最う高村は上つて來た。
「まあ、能く被入つて下さいました」
「突然にやつて來て濟まんですな」
座が定まると、秀香は初めて男が酒氣を帶びてるのに氣が付く。何處で飲んで

來たのか、大分醉つて居るらしく、猫板に肱を突いて、眞赤になつた頬のあたりを押へながら、充血した眼色に力なく、折々下を向いては、苦しさうに息を逸ませて居る。

「まあ何日お歸りでして、妾まだ早くつても來月末でなければお歸りが無いこと丶思つて居ましたが……。」

「急用で突然に呼び戻されたので、歸つてから最う四五日になる！」

「然うで御座いましたか。」と、火鉢へ炭を加ぎ終つて、炭取を脇へ押やり、

「今晩は何方のお歸り、御宴會？」

何氣なく聞いたのだが、服裝で宴會なぞの戻りで無い事は知れる、何處で飲んだものか、下宿か、茶屋か、それにしても、今まで來たことも無い此處へ、今夜は何うして來たのかと、疑と高村の顏を打成る。

「宴會？」と、高村は眼を瞪つたが、

「は……飛んだ宴會でね、主人役を兼ね來賓を兼ねて唯一人、飲んで了つた、ねえ秀香さん、飲まなきやならんだらう、大に飲まなければ……。」

「おほ……貴君今晩は隨分醉つて居らしつてね、何うなすつたの？」

「はつ〳〵はつ醉つたやうに見えますか、これでも僕は大に眞面目の意りなんです、眞面目に話さうと思つて、態々恁うして遣つて來たのです。」

「まあ然うですか。」と、宜い加減に合觸ひながら、茶の仕度にかゝつて居ると。

「然うですかは、酷いぢやァ無いか、獨僕の身ばかしぢやない、貴女にも關係したことぢやあないか。」

「妾に關係したこと？」顏を上げて高村を見ると、醉つては居るが、態度は成程眞面目らしい。

「何です、妾に關係したこと丶有仰るのは……。」

「知らないのですか。」

「暫く女を瞶めて、二人のことが新聞に出たつて云ふちやァありませんか。」

「え？新聞？」秀香は愕然としたらしかつた。
「貴君お聞きなすつて……。」
「聞いたとも！しかも歴々と二人の名前が書いてあつたそうだが……。」
「否、それは違いませう、妾は只、妾の惡口だけ書いてあつたやうに聞きましたが……。」
「其樣ことは無い、確かに二人の名が出てゐると云ふことです」
「貴君御覽なすつて？」
「否、見は爲ない、見ないけれど間違はない筈だ」
「それでも現に其事に就いて新聞記者が訪ねて來まして……」
「記者が來た？」高村は訊咎める。
「え、、毎朝の、何とか云ひました、然う〳〵浦波！浦波と云ふ人です」
「何、浦波？……訪ねて來た、然うか、其樣ことは些少も知らなかつた。」益々意外らしい顏付で、「で、聞いて行つたのは、甚麽事なので。」

「究り新聞には載つて居ないけれど、妾が眞實貴君と――――瞭り貴君と――云ひませんでしたけど、――――關係があるのか無いのかつて、そのことを……。」浦波が其樣ことを聞きに來たんです……。」仰向いて天井を睨めながら、何か荐りと考へて居つたが、
「愈よ彼奴の細工に決つてゐる。實に不都合な奴だ、怪しからん奴だ、それを――――其樣男と同腹になるなんて……。」
我知らず聲に出して呟いたが、不圖秀香の傍に居るのに氣が付くと、そのまゝ口を噤む。
「貴君も浦波と云ふ人を御存知なのですか」
「知つとるとも！」高村は投げるやうに云つて、現に今日其男に會つたのだ、しかも不都合極まる處を見付けたのだ」
「まあ然うですか」
何の事か分らぬが、高村の氣勢に氣を奪られて、一心に其顏を瞶めてゐる。

「秀香さん貴女や僕の事を新聞に出したのは、皆彼奴の小細工なのですよ。それば
かりなら宜いが。其様ことよりか最度々々不埒なことを工らんで居るので
す」
「甚麽こと？」
「甚麽ことつて、お話しにも何にもならん實は僕、今日、其ことで名和へ行つ
て來たのですがね」
「名和さんと有仰るのは絹子さんの……！」
「然うです、その絹子と大いに爭論を遣つて來たんです、所が、何うでせう、
能く〳〵聞いて見ると、何うも浦波と云ふ奴が、蔭で大分絹子を突付いて居る
らしいので……」
「其様ことがあるのですか」呆れたと云ふやうな顏色。
「それやこれやがあるんでせう、だから今日は僕、自棄を起して、大に飲んで
了まつたので」

「それで、お嬢様の方は、何うして居らしつたのですか。」秀香が心配さうに又
訊くと、高村は口に含んで居た莫の煙りを、酒臭呼氣と共に、フッと吐出しな
がら「ふゝゝゝ」と、自から賤むやうに笑つて。
「まあ那様ことは何方でも宜い。それより秀香さん、久振りで何處かへ行きま
せうや、ねえ、行きませう」
「まあ、貴君まだ召上ろうと、仰有るの……」
「えゝ飲みますとも！飲まずに居られん譯があるんですからなあ」
「其様こと仰有つて、若し又人に知れるやうなことでもあると……私は何です
けれど」
「介わん、更に構はんです。世上の毀譽輕きこと雲の如し……や、僕はもう
覺悟して居るんですからな」
「それでも……。」と。秀香はまだ澁つて見せる。
「厭？厭なら仕方ないです……」

「まあ隨分ですはねえ……」

「それぢやア行きませう、さあ行きませう。」無上に勸める。

「ですけども……。」…云ひかけた時、戸外に詩吟の聲が聞えて、がや〳〵と騷ぎながら歸つて來たのは、隣家の自炊學生の一群らしい。と、秀香は口を噤んで、心有りげに男の顏を見たが、高村は俯向いて喫みさしの莫を弄りながら、耳を澄まして戸外の吟聲を聞いて居る。

「高樓傾け盡くす三杯の酒……。」

靜かな夜を破つて、朗々たる吟聲が又戸外に起つた。

(三十四)

明日にも戻ると云置いて熱海を去つた絹子は、其翌日無事着京の端書を寄來した限り、何うしたのか歸つて來ない、芳子とお仲は今日こそ明日こそと、心待ちに待ち暮して、早くも一週間の上を過ぎた。

お仲は初め二三日は宿屋住居を暢氣とも思つたが、絹子が歸らぬので心配にはなり從て保養も身にならずといふ始末で、且つは主人への首尾も考へられ、芳子に向つて幾度か歸りたいと云出したのであるが折角絹子が那云置いて行つたのだから、兎に角手紙なり何なり來るまでと留められる儘浮か〳〵としてゐる内に、大分日數が經つて來た。今はもう遲々しては居られないと又歸京の事を芳子に相談した、芳子も餘り絹子の來やうが遲いので、何うした事であらうと心を痛め、左に右お仲を一旦歸す事にした。歸京したらば早速模樣を知らせて呉れるやうにとお仲に賴み、絹子へは手紙を托した。で、明日の朝早く熱海を立つ事に決まる。

芳子は急に一人となるのを心細く思ひ、迫めては此處に居る間なりともと、正午からは強いてお仲を誘つて、散歩に出懸けやうとした。

今朝の新聞を見ると、上野の櫻も大分色付いて來て、清水堂のあたり、早咲きの一輪二輪が開き出したと、物珍らしさうに書いてあつたが、東京とは十餘度

も違ふ。此地の暖かさは、今花の眞盛である。梅園に比較しては取立てゝ云ふ程の名所は無いけれど、此處の社彼處の庭と、老木若木の差別無く其艶麗さを競つて居る、此地に保養の人々は大底都の煩を避けて來たのであるが、花に浮き立つ心は自から都戀しく、いつか一人二人と減つて了つて、何處の温泉宿も冬中の賑さとは反對に今は最う閑寂となつた。

芳子とお仲は、昨日まで度々濱邊へ行つて割合にまだ山の方へ行かぬから、今日は來宮神社へ參らうと決めて、出懸ける仕度に掛つて居ると、其處へ宿の女中が「お手紙が參りました。」一封の書狀を置いて行く。

「まあお嬢樣からですよ。」お仲は一寸上書を見て、芳子に渡すと、芳子は直ぐ其封を披いて、慌しく讀み始める。お仲は傍に畏つて、樣子如何にと、瞬ぎもせず芳子の顏を見戍つて居る。

手紙の始には、歸京後色々餘義なき事情が出來て、未だに再遊の約を果すことが出來ぬとの、言譯が書いてあつて、續いて其餘義なき事情の逐一――――豫て

約束した所夫高村のこと、それが或る怪しき女と關係あると云ふ噂さを聞いたこと、それが爲めに熊々歸京したこと、歸京後それが動機となつて自分と高村との間が圓滑に行かぬこと、自分は不圖したことから却つて高村の爲めに由ない疑を受けて居ること、それやこれやの事情が繼れ〳〵れて今は緣談が殆ど破毀する迄の危殆に差逼つて居ること、自分はそれに對して、未練の何のと云ふことは無いが、次第が次第であるから、緣談の破約は自分の恥辱となること。それが如何にも無念であるなど、凡そ半紙十枚へ細々と書いてある。最後に這麼ことは、病中の貴女に聞かすべきでは無いけれど、自分は今、それが爲め日夜尠なからぬ苦悶に惱んで居る、其苦悶の遣る瀨なきまゝ、心ならずも此手紙を書いた、何うぞ其積りで讀んで呉れと賴んである。

其前半はお仲に聞いて最う知つてるが、歸京以後の樣子は更に知らなかつた何か事情が起つた事とは推して居たが、恁うまでの重大な事件であらうとは思はなかつた絹子は嘸かし獨で思ひ惱んで居る事だらうと考へると、氣の毒だ、可

哀さうだと云ふ思が先きに立つて、芳子は手紙持つ手も慄え、何時か最う目は一杯の涙であつた。

其樣子を見たお仲は心配さうに、

「あの、お嬢樣の御樣子は甚麼で御座います。」

「何だか大變難かしさうな御樣子よ！」

「難かしいと申しますると此方へ被入しやることがお難かしいので御座いますか」

「いゝえ、それ處ぢやアないのよ、最度ね……その高村さんと有仰る方とお離別になるかも知れないと云ふやうな……。」

「まあ那樣事が起つたんで御座いますか。」、お仲は梟のやうな目をして驚く

「お仲さん、妾散歩を止めますよ、これから直ぐ返事を絹子さんへ出しますから。」

芳子は早くも机の傍へ身を寄せて、筆や紙を取出しながら、色々絹子のことに

就いて考へた。

絹子は、自分の昔と同じやうに勝氣な然うして賬かな性である、情が昂ぶると隨分思切つた事を云ひもし、爲もするが、一度氣が挫けると共に、急に又女々しい涙つぽい心を起すのが常であらう、今度の事件も、その負けぬ氣から、高村の噂を耳にして、一圖にそれと思詰めて了つたのであらう。自身心の潔白を信ずるの餘り、浦波に對する處置などは全然考へずに、只々高村の不都合を腹立つて了つたのであらう。それが段々の行違ひから、思の外の大事となつて絹子は定めし意外に感じたことであらう。然う考へると、絹子の弱い便ない心も想遣られて、何うかして其苦悶から救つて遣りたくなる、自分が東京に居るのなら……でなくとも、迫めて身体でも丈夫であるなら、直ぐにも上京して、出來る丈け絹子の爲に盡して遣りたい、が、今の境遇ではそれも出來ぬ。迫めては手紙でなりと……

然う思つた時芳子は不圖自分の境遇を回想した、自分は信仰心の強い嚴格な所

夫に嫁付いて、見たい演劇一ッ見ることは出來ず、三度の御飯を喰べるのさへ、一々厳しい祈禱を捧げた後でなければ、喰べることが出來ぬやうな、那樣堅苦しい生活を強ひられて、寂しい、充らないのそればかし考へて居た、處女時代の放縱な、自由な生活を想ひ出しては、もう一度那麼ことがして見たいと、昔のことを羨んだ、併し自分が若し今迄獨身で居たら何うであらう？昔のやうな放縱な心で今日迄居たとすれば甚麼であらう？自分は縱し清い考で居ても何う睨かされて墮落して居るかも知れぬ、絹子の今のやうな有らぬ疑ひを、世間の人から受けたかも知れぬ、美くしい絹子は、假令今の緣談が破談にならうとも、亦何日でも想ふやうな良緣を求められやうが、縹緻は所詮絹子の足許にも追付けぬやうな自分は、或はそれが爲め一生埋木と成つたかも知れぬ、或は又、若しも其所夫が不行跡な人であつたとしたら、自分の苦悶は何うであらう、所夫に捨てられるやうなことは無からうか、所夫が他へ氣を移すやうなことは無からうかと、其樣氣苦勞に永い一生を過さねば成らぬかも知れね、よし演劇が見ら」

れたにした所で、其樣苦勞したら、何にもならぬ、假令單調であらうと、堅苦しくあらうと、自分の如き境遇は却つて眞の幸福と云ふべきでは無からうか？久振りで絹子に逢つて、其派手な活々した姿を眺めた時、寂しい單調な生活に倦き果てゝ居た自分は、只一圖に、絹子の自由な境遇が羨ましくてならなかつた、併し今考へて見ると、それは確かに誤りであつた、快樂でも不安の伴ふ境遇と知らなかつたのだ、單調の裡に平安の包まれて居るのを知らなかつたのだ、自分の境遇は確かに滿足すべき境遇である。併し絹子の境遇は？……今迄羨ましい、望ましいと思つて居た絹子の身の上が、却つて痛々しくも情れにも思はれて來た、何うか出來る限り慰めたい、自分の力の及ぶ限り、盡せる丈の力を盡したい……然うだ、絹子が今の煩悶も、究まる所は、浦波に對するやうな由ない交際を結べばこそである、委しい內情は分らぬが、少くともそれだけは、確に絹子の落度と思ふ、親友として自分はそれだけのことは注意しやう、廻らぬ筆に縱し其力なくとも若し絹子が反省して呉れたらば、

と、筆を取つて紙に向つたが何處を初めに書いたものか幾度か筆に墨汁を含ませながら、双の臂を机に靠せて、じつと思を凝らして居た。

(三十五)

過ぐる日、浦波のことに就いて、絹子は高村と言爭つた。其後の彼は今迄の快活さは少しも無く、見違へる程陰鬱になつて、花の噂を初め、何々座の新狂言音樂會、やれ何の會と、毎もの絹子ならば我先に行くべく、色々の噂があるのをも振返らず、只自分の部屋に閉籠つたまゝ、鬱々と其日を送つた。

浦波も何うしたか、其後姿を見せぬ。

絹子は今、芳子の事を考へて居た……那の手紙は最う着いて居るだらう、芳子は定めし吃驚したことであらう、情に厚い芳子のことだから、今頃は那の返事を書いて居てくれるかも知れぬ、若しも返事を呉れるとしたら、甚麽ことを書いて寄來すであらう、其樣事を考へると熱海滯在中の樂しさが繰返されて、現在が寂しく心細くなる、春の夕暮がいとゞ其寂しさを深くする、風光變化の迅速な春！或時は其生氣を愉快に見た彼が、今は漫ろ無常を感じる！變遷其物が既に敢果なく胸に響く、絹子は机に靠れて、深く〳〵沈んで居たが、

「お嬢樣」と、懐かしさうな聲が窓外に聞えて、聽て入つたのは、思ひも寄らぬお仲である。

「まあー何時お前歸つて來て？」……、絹子は我を忘れてお仲の傍へ躙寄る。咄嗟の思ひは芳子が來て呉れたやうにも嬉しく、聽て其消息を聞けると喜んだ。

「まあお暗いではありませんか。」立上つて電燈を捻る、室内がパッと一時明るくなつた。と、お仲は又元の座へ直り、凝然と絹子の顔を瞶めながら、

「芳子さまも私も、まあ何のくらゐお出でをお待ち致したか知れません、それは〳〵毎日首を長くしてお出でになるのをお待ち申しましたので御座いますよ」

「然うだつたらうね……妾、早く行かう〳〵と思つて居ても、色々用が出來て了つたものだから、ついね……芳子さんも屹度怒つて居らしつたらうね。」

「何う致しまして、中々お怒りどころですか。何うなすつたらう〳〵と、それはそれは随分御心配なさつて被居います……。」
「本當に怒つてではなくつて？。」
「え〳〵……其處へ昨日恰どお手紙が着きましたものですから……。」
手紙といふ言葉で氣が付いて、傍の小風呂敷から、芳子の手紙を取出す。
「あらお手紙！」と、絹子は懐かし氣に手に取つて、今しも其封を切らうとすると、何時の間に來たのか、下女のお春が細目に開けた障子から首を出して、窮屈さうに跪みながら、
「毎もの新聞社の方がお出でになりましたが……。」
「浦波さんかえ」一寸當惑したらしい絹子の顏色。
「あの私、お連れ申しませうか」お仲は氣を利して言ふ。
「然うねえ」と、稍暫し躊躇つて居たが、「ぢや、左も右もお目に懸ることにしやうから……。」

「それでは私は後刻又お話に參りませう……。」
問もなく浦波は案内されて來た。お仲は坐蒲團や煙草盆の用意を濟すと、其儘縁と座を外す。
青白い電燈の光を浴びて、差向に坐つた二人は、それとなく互の顏を窺み見つゝ、稍しばらくは沈默で居たが、浦波は嚮て顏を上げて、
「絹子さん、私はもう二度と再び御宅へ伺はん意りで居ましたが、今迄の御交際に對して、それも餘り身勝手と存じましたので、實は今晩は強ひてお伺ひに出ましたので……。」
云ふ聲音さへ毎もと違つて重々しく、口にも目にも何か決心をした樣子が見える。絹子は胸騒ぎがした。
「それは又何う云ふ譯で御座いますか。」と聞く。
「事情ですか？」と、眼を光らして、膝に置いた兩の手を堅く握り占める。
「それは此處で申されんませんが、私は近頃熟く自分の非を悟つたのです。自

分で自分の痴愚なのに愛想が盡きて了つたのです。」
「まあ其樣こと有仰つて、妾何だか分りませんわ。」
「や、これは何ケも……。」浦波は自分の語氣の、稍强過ぎたのを悔ゆるやうに、握つた其手を無意識に擴げながら、
「貴女に對して恨がましく言ふのではありませんよ……併し絹子さん、私は色種考へた結果、貴女と將來御交際を續けるのは、貴女にも、亦私にも、何了も不利益のことゝ思つたのですが……。」
「然うなんですか、妾のやうなものとお附合して下さつても固より貴君のお爲になるやうなことも御座いますまいけど……。」と忌々しさう。
「いや、爲になるのならぬのと申すのでないのですが……私、何方かと言へば、何時までも、貴女と御親密に願ひたいと思つて居るですが、考へて見るとそれでは何うも濟まんのです。貴女に對して濟まないと思ふのです」
「濟むの濟まないのと有仰つて、何も其樣事は無いやうに思ひますが……。」

「否、濟まんです、貴女が假令宜いと有仰つても私が濟まんです、私の良心が濟まんのです、私これまで、貴女とお近かしくなつてからと云ふもの、貴女のことで何の位煩悶したか分らんので」
浦波は一寸言葉を切つて、燃ゆるやうな眼を瞪つて、絹子の顏を打成りながら、
「這樣ことを申して、甚だ失禮ですが、何うか今晩限りと思つてお許し下さい、私、今夜は一切、貴女の前で懺悔する意りで上つたのですから……。」
「懺悔なぞと其樣こと有仰られると妾困りますわ」
「いや、懺悔も少し大業ですが、左に右自分自ら其非を語つた事をお話したいので……。」
「然う有仰られると妾だつて貴君にお詫び致さなければ成りません」
「貴女が私に、否、其樣ことはありません、只私はつく〳〵自分の不所存が感じられるです。何故那して、無遠慮に貴女と御交際して居つたか……それは今迄とても多少思はぬことは無かつたのですが。二人の關係は全く只、純文藝的

の關係だと、然うばかし信じて居ましたものですから……。」

「それは然うで御座いますとも！」

「否、處が然うで無かつたのです。貴女が普通の處女で無いことを知つて居ながら、文藝に事寄せて、……私實は貴女に御目に懸るのを樂みにして居たのです」

男は深い息を吐く。

頰のあたりを稍赧く染めた絹子は伏目になつて膝の上で芳子の手紙を弄つてゐる。

浦波は又言葉を繼ぐ、

「其樣不都合な心を抱いて居ながら、自分はそれを何とも思つては居なかつたのです、併しそれが、先達てお別れして玄關へ出ると、不圖高村さんにお目にかゝつたのです、其時高村さんが唆と私を見られた其眼光が、不思議に私の胸を刺すやうに光つたのです、私は其瞬間、自分の胸の中に云ひやうなき不安を感

して、其以來といふもの、私は實に色々煩悶しました。言譯がましいことも考へて見たのです併し一旦胸に起つた其不安は……。」

恁う云ひかけた時突然縁側に人の跫音が聞えたので、浦波は慌て、口を噤んだ然うして障子の方を振向くと電燈の光りで其處に映された絹子の姿、俯向いた頰のあたり、鬢の後毛さへも歴々と、思做かそれ震えるやうに見えた。

（三十六）

口髭を捻りながら、悠然と構へたのは主人の水田大佐、例の寛濶な態度は何時に變りないが、今宵は珍らしくも素面である

火鉢を少し退つて、俯き加減に坐つて居たのは絹子。

此處は大佐の居間だ。

「今云つたやうな譯ですからの、高村君だつて何も其女と怪しい關係があるといふのぢやない。併し高村も大に反省しての、其樣事實は無論ないけれど、仮

にも新聞へ浮名を謳はれるやうな不始末は實に申譯ない、と、まあ色々言うてるで、兎に角俺も一兩日中には貴女のお宅へ行かうと思つて居つた處が、先き又高村が來たのぢや……一兩日中に又長崎の方へ立つと云ふので來たのぢやが、其折の話に依ると、新聞一件も何うやら出處が分つたらしいから、段々聞くと、浦波とか云ふ記者があつて、それが獨で機關をして見せたやうだが……けれどそれはまあ宜い、然し、何うも其虚聞捨てにならんのは、其浦波と云ふ男と貴女との關係だがの絹子さん、貴女も高村と一旦約束がある以上、何うも其樣ことがあつては可く無いことぢやがの……。」

「はい」と、絹子は俯いたまゝ顏を上げぬ。

「聞けば熱海からの歸りにも、同車に來たと云ふことだが……それに平素も些い〳〵遊びに行くらしい樣子で、縱令其間に何も怪しいことは無いにもせよ外圍から見れば猶旦不都合の一つだからの。恰ど高村と那の琵琶彈きの女見たやうなもので、貴女が疑を抱くやうに、高村も猶且疑つとるのぢや、私は能く貴女の潔白を信じとるが、外圍からも然う信じられるやうに爲て欲しい。私は高村にも然う云つとる、早く其女と關係を絶つやうにと貴女もじや、高村の疑を解く爲に、其記者とやら云ふ男との交際を斷つ譯に行かんかの……。」

傍の箱から、大佐は葉卷を取つて、火を付け、スベ〳〵と喫かしながら、絹子の答いかにと構へてゐる。

絹子は俯いたまゝ、默つて話を聞いて居たが、其間にも、胸の裡には樣々の感想が、梭の如くに來往した、此十日ばかりと云ふもの、自分の運命は、實に不思議な位變轉してゐる、浦波の手紙で一圖に高村を疑ひ、由ない騷を惹起した爲に、却つて自分と浦波との關係を高村に疑はれるやうになつて、緣談は今反古になりかゝつてゐる、這麽ゴタ〳〵のある場合、唯一の力と賴んで居た浦波は到頭自分を捨てるやうになつて了つた。今は打明けて語るべき者は熱海に居る芳子一人である、此間女中に持たせて寄來した那の手紙を見ても、自分のことを色々〳〵心配して呉れる心切さが分るけれど、その芳子は遠き熱海にあつて病

んで居る、今は殆ど語るべき友も無い身の上である、外邊を飾つて交際する友は幾らもあるが、打明話をする程の親友は無い考へると實に寂しい、心細い、道麼ことなら、寧そ何も言はねば宜かつた、高村に當つたからこそ、這麼羽目にも陷ぬつたと。今更に悔悟の念も湧く、併し大佐が恁うして態々自分を呼び寄せるからには、高村との間も舊に反る望があるのか！浦波のことは思ひ切る迄もなく、もう現に斷交して居る、今度の事件の原は皆自分の罪である、謝罪する意りはある、併し高村の考は何うであらう、今度の事で、自分に對する情愛も、定めし冷果てたことであらう……、恁う思ふと何となく氣が挫けて、一人寂しい荒野の中に佇んで居るやうな心地がする……。

「何うぢやの斷つ譯には行かんかの。」と、覗くやうに其顏を見る。

「妾、お話のやうにするのは何でも無いことですが、それで高村さんは御承知になるでせうか。

「高村君の方かの？」大佐は一寸小首を傾けて

「未だ私も確とは聞いて見んがの、貴女が第一然ういふ心と極れば、更に說いて見やうと思うのぢや……、高村も無論心を取直すこと丶信じとるが……。」恁う云つて、大佐は又葉卷を喫かしながら睃々と絹子の顏を瞶めるので、絹子は段々に俯いて了ふ。

「先刻も云つた通り、高村君は二三日中に又長崎へ行くと云ふのだから、何うかして其前に互の氣拙さを直したいと思ふ、貴女のお父さんや、お母さんには無論這麼ことは話して無いし。此儘納まれば私も至極滿足ぢやから……。」

芳子の手紙を初めとして浦波の言葉にも或意味を聞きそれに今又水田大佐に說き諭された、絹子は、茲に至つて悔悟せざるを得なかつた、今迄自分の爲て來たことを回顧ると、穩當ならぬところが幾何もある、鼻に懸けることは無かつたにもしろ、平素人から賞められ、美まれて居た自分は、何時の間にか已の容貌を恃みとして男を我が前に跪かせやうとばかり考へるやうになつた、自分は高

村を好ぬではなかつたが、寧ろ高村が自分を好むであらうと然う思つた、自分が高村を捨てやうとも、高村は自分を捨てはしまいと、然う信じて居た。それが秀香の爲めに鈍くも高村を奪られたと思つたので、只一圖に怒りもした、驚いでも見た、併しその怒りも驚ぎも、結局自分に不利となつて、懷に歸るべき筈の男は、却つて益〻遠かるやうな狀態となつた、今はもう意地を立て通す丈の氣力も萎へた。其處へ片腕と頼んで居た浦波は逃げて了ふう。芳子からは忠告の手紙が來る、今は大佐の手に縋つて高村との交情を回復するのが何より緊要のこと丶考へられる。で、一先大佐の勸むるまゝに、其意見に從はうと決心したが、此時、絹子は不圖又、自身で高村に逢つて見やうと云ふ考を起した。那して高村の何時になく自分と諍つたのは能く〳〵腹に据ゑ兼ねたからであらう、それを思ふと、おめ〳〵逢ひ憎くもなるが、會つて語れば、何時かは心の解けることもあるだらう、否、或は案外自分が苦勞する程ではないかも知れぬ。然う考へて來ると、又何でも無いことのやうになつて、高村の優さしい笑顔が

眼前に浮いて見える。で、絹子は直ぐ歸りにでも尋ねることに心を決して、扨て大佐の樣子を見ると、嚴めしい其髯の奥から、朱のやうな口唇を開いて、「何うじやの。」とばかり凝と絹子を見て居たが、其眼には態とならぬ笑も見えた。と、絹子は自分の心を見拔かれたやうに思つて、又耻かしさうに下を向いた。

（三十七）

高村は歸京した用件も略方片付いたので、再び長崎へ出張することゝなり、滿都の人々は皆花に狂して何れも樂しさうに見える中を、已は甚だ不愉快な心持で愈よ明日は出發と云ふ、その前夜となつた。

意外な歸京に、意外な出來事！僅かな日數の間に、高村は隨分色々な事に遭遇した、我ものとばかり信じて居た絹子は、仇し男に心を傾けてありし、日の樂を繰返す事は出來なくなつた。前には顏見るのさへ只嬉しかつたが、今は絹子の噂を聞くのも厭になつた、有爲轉變とは能く言ふ事だが、何といふ情無い人

の世であらう、花のやうな絹子に送られて、春心地に門出した以前に引替へ、今度の出張に對して高村は秋か冬のやうな氣が爲る、併し其寂しい胸の裡にも猶厭々たる一味の春は殘つて居た、秀香といふ慰藉があるからで。

絹子が高村を遠ざかるほど、高村は愈よ多く秀香に近付いた。新聞の一條があつて以來は、秘密にして居た其會合さへも今は公然爲るやうになつた今夜も別の盃を取交して居る、而も高村の下宿で。

眺める庭とても無い仮居住だが、主婦が氣を利かせて活けて呉れた八重櫻が、今丁度八分の見頃で、閉切つた室内は稍蒸すけれど、窓を開ける程でもない。

高村は美酒佳肴を控へて、花を後に、秀香と左向に座つて居る、宴を初めてからまだ間もないが、高村は早陶然として。

「さあ秀香さん、貴女も澤山飲んで下さい、愈明日から、又四十日ばかりお目に懸れんのだから、今夜は大いに飲みませう、飲んで大いに語りませう」

「えゝ頂きますとも……。」秀香はさも〳〵嬉しさうにして居る。

男の盃を受けながら、

「恁うして無遠慮にお宅へ伺ふなんて、隨分厚顏しう御座いますのね、此家の主婦さんも定めし駭いて居るでせう。」

「駭いても介はんさ、足がある人間だもの、來たい時には何時でも來やうから……。」

「まあ其樣こと有仰つて……。」と、秀香は笑ひかけた口許を、手巾で掩へ、

「でも餘り厚顏しいおやアありませんか、妾のやうな者が、臆面なく貴君のお宅へ伺ふなんて隨分ですからね……。」

「何も然う卑下するには當らん、貴女は一人前の藝術家として立派なものだから。」

「あら、那麼こと有仰つて、御戯談ですわ、妾なんか、藝術家の藝の字だつて知りませんもの……。」

眞面目になつて辨解する秀香の樣子を、高村は興あるやうに眺めて、

「はゝゝゝ藝術家は可けませんか、ちゃ慈善家、然うだ、貴女は確かに慈善家だ。」

「慈善家？」と、非意味の悟れぬらしく、眉を上げて高村を見る。

「貴那は慈善家に違無い、渺くとも僕に對しては大々的慈善家だ」

「那樣御冗談ばかり有仰つて……妾には何だか分りませんわ」

秀香は樓つたいやうな眼つきをする。

「それでも貴女は奈落の底へ落ちかゝつた僕を救ひ上げて呉れたではありませんか」

「おほゝゝゝ其樣事があるもんですか、まあ厭な……。」

呆れたらしく横を向いたが、

「それにしても、此家では變に思つてるでせうね、ちやんとした奥樣が居らつしやるのに、妾のやうな者が入込んで來て……。」

「奥樣？奥樣つて誰です」

「誰でもありません、お嬢樣の事ですわ、那の絹子樣とか有仰つた……」

「はゝゝゝ絹子のことですか、僕はもう那麼女は眞平御免です」

「御免と有仰つて、ちゃ貴君は何處までも御見捨てなさると云ふお考へですか」

「見捨てるも見捨てぬも無いちやァありませんか。此間も話した通り、自分は新聞記者なんぞを傍へ引付けて置きながら、有りもしない貴女と僕の關係を新聞へ載すなんて、實に不都合極まる話ですからね、僕は最う疾うに心を決してゐる、併し中間へ入つた人に對して、然う一徹なことも云へないので。まあ曖昧の裡に捨てゝは置くのですが、早晩事は破裂するやうになるでせう」

「お嬢樣は甚麼お考で被居しやるのですか」

「甚麼考でゐるか僕は知らんのです。一切最う中間の人へ委せてあるのですからな。併しそれが何う成行かうと、僕は介はんです、僕には現に貴女と云ふ大なる慰藉があるのですからな、もう女房も要らぬ、子も要らん」

「其樣こと有仰つて、妾なんかほんの御酒のお對手位しか出來ないちやァ御座

いませんか」
「御酒の對手！それが出來りやア結構でせう、や、秀香さん、僕は今まで女と云ふものを誤解して居たのです、女房に持つなら、美くしい身分も、教育もある――――今考へると馬鹿々々しいですがね、それは種々雑多な注文を出したものだ、それが爲め今度中間へ立つて呉れた人とも隨分劇論したこともありましたが、今考へて見ると、實に馬鹿々々しくつて……。」
「然うですかねえ……。」と、秀香は高村の話の稍耳遠いやうな顔付して。
「然うしますと、貴君は甚麼女が宜いと有仰るのですか。」
「さあ。」と、高村は一寸考へたが、僕はもう女の容色も身分も、教育も何も望まん、只僕の氣に入つたものなら……氣に入るやうに僕を扱つて呉れる女なら……。」
自分は學術の爲に全身を捧げて居るものである、容色も教育も將た身分も、それが自分の心に累を及ぼすやうなものなら何にもならぬ。自分は只自分の鬱悶

を慰めてくれるものであれば、それで宜いと思つてゐる――――然う云はうと思つたが、秀香に其趣旨が呑込めぬだらうと考へて、其儘口を噤んだ。
話し〳〵飲む内に銚子が幾度か更へられて、高村は盆す酔つて來た、秀香はと見れば、これも最う大分顔が赧くなつて居る、心付けば室の内は酒氣と火氣とに煽り立てられて、蒸し返されるやうに熱れて來た。と、高村は膝の上の手巾を取つて、額の汗を拭いながら、
「何うも大變蒸しますな」と、秀香の方を見る、
「少し障子を開けませうか。」女が聞く。高村は頷いた。
窓が開くと、冷たい戸外の空氣が流込んで、酒に熱した面を吹かれる心地好さ！首を差延べて前の手狹な庭を眺めると、室を洩れる洋燈の光は、鏡の如く地に曳いて居る。空を見ると少しばかりの星がチラ〳〵瞬いて、濕とりとした靜かな晩だ。

＊　＊　＊

水田大佐の宅を辭した絹子は、高村を尋ねやうか何うしやうかと、車上で色々考へた末、思切つて尋ねて見る事にした、今宵を空しく過ぎて、明日にも高村が出發したら、再び歸る迄は逢れぬ、逢はねば男の心が愈よ變るかも知れぬ。と疑はれたのである。

毎もは下宿の入口まで、俥を付けさせるのを、今夜は有繋にそれも氣が咎めるので、三四軒手前の曲角で俥を下りる。

下宿と絹子の家とは、大した距離でも無いから、車夫には一時間程經つたらば又迎ひに來るやうにと吩咐けて家へ歸す。

絹子は今其家の前に立つた。

入口には戸が一枚立てゝあるが、何うしたのか格子は開放しになつて居る。絹子は内に入らうとしたが、何う云ふものか足が出ない、覗いて見ると、内は閑寂として話聲も聞えぬ、高村は留守なのではあるまいかと心許なく思ひながら暫く其處に立つて居ると、後の方から人の來るやのな氣勢。若し怪しまれては

と、氣が付いて二足三足歩み出す。

高村の居間は一番奥の座敷だから、家に沿うた路次を廻れば、或は居間の模樣が分るかも知れぬ、然う思ひながら路次を入つた。

裏へ廻ると、細かい杉の生垣があつて、庭を隔てた窓のあたりに、煌々と灯影が煌めく。と、花やかな聲で高村の笑ふのが聞えた。客が來て居るらしい、絹子は然う思つて猶耳を澄すと、相手は何うやら女の樣子！絹子は身の血が、一時に沸き返るやうに覺えて、我知らず其處へ倒れさうになつた。

「秀香！然うだ、然うに違ひない！」

恁う思つた時、憤怒、嫉妬、悔恨、樣々の感想が、胸を突いて、肩息を爲ながら座敷の樣子を窺つた。

笑聲は磯と歇んだ。

自分が此處に潜んで居のを、氣取つたのか、と先づ思つた絹子は、軈て室内の靜かさに愈よ嫉妬を然して居た、と、此時琵琶の調べが突然聞えた。

絹子は其意外に驚いたが、猶息を殺して耳を澄す。

「紅葉うつろひ、あしか散る、秋のあはれのいと深き、潯陽江の夕まぐれ……

……、」

嘈々たる絃線に連れて、低く強く謳ひ出したは、「潯陽江」の別れの一曲。

扨ては別れの宴でも張つて居るか、と、又更に絹子は嫉妬を起したが切々たる哀音、泣くが如く怨むが如き、時々撥音も聞えて、高村と秀香とは今正に切なる思を語つて居る如くである。絹子は宛がら胸を掻撈らるゝやうな心地。

「曲も今はとなりし時、撥を收めて四つの絃を、只一聲にかきなせば、さながら絹を裂くごとし、東の船も西なるもたゞ、悄然と聞惚れて、物言ふ人もあらばこそ、秋の浦風身にしみて、水底白く澄み渡る……、」

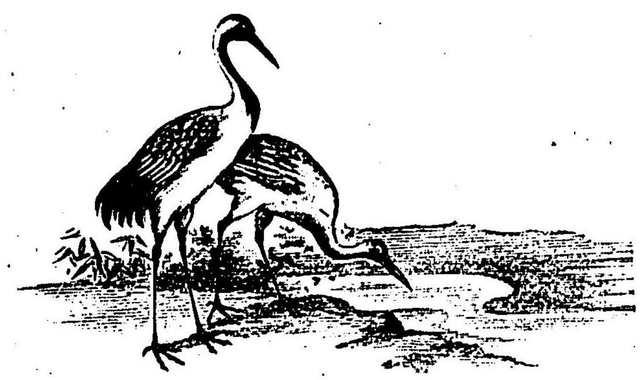
歌は愈よ佳境に入つて、其所謂絹を裂くが如き絃聲益す急に、哀音夜氣と共に漂ひ行く、絹子は身内冷え渡つて、唯神々しさに包まれた。

嫉妬、怨怒、悔恨、心の穢は名殘なく洗はれて、靜寂の神氣胸に滿ちた。假令

はゞ身に翼ありて大空を翔るが如く、嫋々たる絃聲の響を辿つて、絹子の憧れ心は、只管に其美しい聲の後を追うた

女

終



明治四十一年八月廿八日印刷
明治四十一年九月二日發行

著者　小栗磯雄
　　小川泰助

發行者　東京市本郷區天神町二丁目二十五番地　日高藤兵衛

印刷者　東京市神田區三崎町三丁目一番地　小西幸吉

印刷所　東京市神田町三崎町三丁目一番地　日本印刷株式會社　電話本局千八百四拾番

女郎付
定價金七十錢
郵稅金八錢

著作權所有

發行所　東京市本郷區天神町二丁目二十五番地　日高有倫堂

大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
東京市京橋區中橋廣小路	川瀬代助社
東京市日本橋區住吉町	前田誠文館
東京市神田區表神保町	玉川堂
東京市京橋區尾張町	警醒社
大阪市備後町四丁目	上田屋
大阪市心齋橋南久太郎町	吉岡寶文館
名古屋市本町	福音社
名古屋市本町	川瀬代助社
靜岡市上魚通	小澤百架堂
靜岡市馬場町	明治堂
京都市三條川原町	文源堂
岡山市四大寺町	寶文館
岡山市中町	奥田金昌堂
廣島市鹽屋町	森博文堂
廣島市東橫町	積善館
周防國岩國町	友田藤助
山口大市町	白銀日新社
下の關市四南部町	仝支店
筑後國久留米市	上山文英堂
熊本市新町	菊長崎竹吉
高知市種崎町	澤本駒次郎

横濱市辨天通	正心堂
信州上諏訪町	宮坂日新堂
信州松本市	松榮堂
信州長野市	西澤喜太郎
越後國長岡	鷲張次平
越後國水原	西村六平
越後國新潟古町	西村支店
高岡市守山町	學海堂
金澤市片町	宇都宮書店
水戸市泉町	川俣銀藏
前橋市曲輪町	煥乎堂
宇都宮市馬場町	仝支店
宇都宮市鐵鉋町	內田正榮堂
仙台市大町	藤崎書店
仙台市大町	鈴木榮三郎
仙台市大町	松榮堂
陸中一の關	佐藤喜平
弘前市土手町	今泉道太郎
青森市米町	仝支店
北海道札幌南一條四三丁目	富貴堂
北海道函館末廣町	弘文社

大町桂月 白河鯉洋 笹川臨風
小柳司氣太 樋口龍峽 合編

近刊

むら雲

定價金壹圓
送料金拾錢

奇怪不羈の奇才を以て縦横の筆を揮ひ前後十有余年の間明治の論壇に濶歩せし田岡嶺雲先生今や病床ありて空しく枕辺を無して飲奇不遇を嘆ずる先生の知人故旧乃ち一大文集を編して先生に呈し其病を慰めんとす筆を取るもの六十余名皆當代一流の論客文士「政治家あり、學者あり、小説家あり明治文壇の偉觀收めて集中にあり 苟も文學を口にするものは必ず此の集を携へざる可からず

近刊

外國之芝居

松居松葉君著 挿畫十數葉入

定價壹圓
郵税拾貳錢

劇界家として將作劇家として當代に濶歩する松居松葉君藝に世界を一周して專ら演劇を研究するや歐米各國の俳優双手を開いて君を迎へ有らゆる便利を與へて其研究を助く、君が歐米演劇に對する智識の深くして且つ博き蓋怪む足らざるなり、君歸來、幸にして病を慶、久しく此貴き研究の結果を世に示す能はざりしも今や少快病床に紙を展べて茲に此一篇を成せり泰西の梨園に關する事實一として漏れたるは無く其觀察の精密にして銳利なる往々にして歐米風俗の裏面に及ぶもの有り演劇界漸く多事ならんとす苟くも文藝に志ある人々は一讀を要す

田口掬汀著

小説

一葉草

定價八拾錢
送料金拾錢

今の小説は青臭くて鼻持のならぬものが多い、「二葉草」の著者は是が大嫌ひだ。

今の小説の材料は大抵男女の情事である、然らずんば肉慾派と稱する牛肉屋か豚屋見たいな冠詞の下に書かれる淫事だ、「二葉草」の著者は是が大々嫌ひである。

「二葉草」は勁作である、譯の分らぬ變な作だが流行の臭さ味のない點が唯一取柄だと我から自慢する 人の感心すると否とは作者の關するところでない。

小杉未醒譯 幷に畫八十餘枚挿入

近刊

繪本新譯西遊記

定價八十錢
郵税八錢

當代の奇才未醒、千古の奇書西遊記を新譯す、物當に其處を得たり、アラビヤンナイトを好み、ロビンソン漂流記を好み、水滸傳を喜ぶものは、亦來つて此の新にされたる奇書に接せよ、八十有余の滑稽的挿畫孤邊閑素なる譯文と相俟つて諸君の清趣より明瞭さん也

伊藤銀月著

近刊

偉人達人

定價貳五錢
郵税六錢

奇を愛する銀月先生が趣味を以て古今東西二百有余の偉人達人を選し其人物箇々の眞骨頭を躍如たらしむべき代表的一二の行動を描寫し添ふるに動拔なる短評を以てす卷を開けば蘇宕なるもの飄逸なるもの奇絶横溢せるもの痛快淋漓たるもの偉人の面目嘖々人に迫る眞に人界の大觀奇景也之を讀んで凡骨を練磨すべく有爲の氣象を養成するに足るべし

牛井挑水著

新小説

濡衣

定價六十錢
送料八錢

玲瓏たる姉の果子は清き心に月を宿し花を飾る妹錦子は卑き胸に穢れを包む、遂に一本を賭ひ此の姉妹對照の妙艶を味ひ給へ

江見水蔭著

近刊 小説 **女馬賊** 定價壹圓 郵税拾錢

文學的の冒險小説、詩化されたる事實談は是也。著者獨得の筆致を揮ひて、文章に此新方面を開拓す。自然不自然を論ずるの遑なく、一讀せざる可らざるの快著たるを疑はず。

薄田泣菫君題詩　小島烏水君序文
蒲原有明君序詩　清水橘村君著

新刊 新體詩集 **筑波紫** 定價四拾錢 郵税金六錢

作者橘村君は、これ常陸國、筑波山麓橘村の人、東西漂泊の生活を氣むること甚だ余年、蘆荻のひゝき、山禽の聲あした夕の水の音、みなその間に入りてまた一卷の詩集となる。凡そ近代的悲哀の情緒を味はんとするものは、請ふこれを森林の陰晴さ所、草原の暮れ行かんとする所に繙け、青年が語らんとする所の情緒はみな收めてこのうちにあり

伊藤銀月編

机上圖書館 第二編 **萬國地理主點** 價壹十五錢 郵税六錢

地理書は讀み去つて益も多く頭腦に印象を殘すものを優とす本書材料の取捨按排繁簡の適度を得叙述亦簡勁適切讀者をして容易に明晰なる地理的觀念を得せしむ獨り國民机上の寶典たるのみならず又受驗用書として中學生諸君が頭腦の經濟を資益するや疑無し

齋藤無絃著

小説 **天國** 價六拾五錢 郵税金八錢

貞潔の淑女有爲の士官主人公となり青春の情緒匂やかに舞臺は海外に亘りて四角戀女の逐げ難き戀、妹と知らざりし伯爵世嗣の悲しき戀、抛げたる戀を抱いて死に行く淑女の悲慘　花を墓前に捧げて大息する士官の哀悼、結構複雜文章流潤、時代人情時代心理の秘奥を開き惻々として人の胸を動かす

伊藤銀月編

机上圖書館 第三編 **科學新潮** 價三十五錢 郵税六錢

科學の進歩は元素を細分して最新の電子論を生み電氣の新利用は隆盛を極む或は動植物の改造人間の改造をも企圖し殖魂の形狀重量を衡り不思議の事の新研究を生み其他天文物理醫學心理學等何れも新新なる研究發見を胚胎せざるはなし本書は平明に是等の新潮を紹介し興味實益兼收全からしむ蓋に机の珍寶也

半井桃水著

新刊 小説 **萩の下露** 定價六拾錢 送料八錢

人間萬事金の世に金を見る芥の如き正庶源白の人を寫して諸君の溜飲を下げんとする一讀の清涼劑なり

伊藤銀月編

机上圖書館 第一編 **萬國歷史要領** 價三十五錢 郵税六錢

是れ机上圖書館の第一編として出でたるもの也、著者は特殊の觀察眼を有せる歷史家として社會に認めらるゝ人世界の歷史の要領を此一卷の中にコンデンスして、一讀東西の進歩變遷を會得せしむべきもの也、簡明に適切なること未だ本書の如きものあるを見ざる也、試みに一本を購うて此頁の當否を見よ。

新刊 **安全なる結婚** 定價拾八錢 郵税金四錢

本書は東京朝日新聞に連載して、大歡迎を受けたる、當代二十大家の安全なる結婚に關する意見を蒐めたるもの

現代の女學生及び父兄の愛讀を勧む

理學士（數學專攻）河野德助著

新刊 初等 **代數學講義** 上卷

定價金壹圓 郵稅拾貳錢

初等 **代數學講義** 下卷

定價金壹圓 郵稅拾貳錢

●上製總ページ數上下約千頁●本書は初等代數學を最も斬新なる方法により詳密に講述したるものにして、初學者の解しやすき所を指摘し、立論の正確なるを期し、これ充分の注意を與ふることを勉めたるなり。殊に數百種の練習問題を補へて、これが解答を試みしめたるなり。解法に疎みて如何なる問題に當面すべきかを一々指示し、數學思想の涵養に資するとは他に比類なき所なり。すべからく內容の豐富なる所、紙數に微して明かなり

小栗風葉小川獸水合作

近刊 小說 **女**

定價七十五錢 送料金十錢

女！彼の創世記の樂園に於けるイブ此のかに、有ちゆる智人と有ちゆる詩人とが、解いて而つも盡さゞる千古の謎なり、或は夢の如く清く花の如く麗はしと云ふもの、將た泥の如く濁りて毛虫の如く厭はしと云ふもの、何れか女の一面にあらざる、佛寫元紙、美醜相錯綜して、其所に女の眞相を捕捉するもの則ち此篇也

天野誠齋編

新刊 名流實話 **身體健康法**

定價廿五錢 郵稅金六錢

名流の實話今や稿を累ね以つて小冊子を編むに至る、畢竟是れ世を利し人を益する事、斯くの如き著名なる實話も、時と共に多く散逸するの恨みあればなり。此書編して身體健康法と名づく、速に一本を購い名士の健全なる精神を汲んで、各自の身體健康を增進するの道を講じ給へ。

小松小兒科院長　小松貞介先生著

近刊 實用 **小兒保育法**

定價五十錢 郵稅金八錢

健康なる小兒も虛弱なる小兒も豈し育て方に依る、本書は兒科專攻の國手として有名なる小松小兒科院長が夙に泰西の學理を涉獵し兼ねて自家の實驗を重ね我國の家庭に最も適切なる育兒法を記述されしものにて既明瞭く實地に渡り懇切なること、手を取つて敎ゆる如し苟も人の親となるもの快活なる健康兒の笑顏を樂まむには先づ此書によつて完全なる小兒保育法を心得られよ

安部磯雄著（上製四百八十頁）

新刊 **應用市政論**

定價金壹圓廿錢 送料金貳錢

本書の論ずる所は都市の發達、市の立法及び行政、市區改正、交通機關、清潔掃除、水道、瓦斯、電氣、公園市場、家屋、衛生、敎育、娛樂、財政等の諸問題にして曾に歐米諸都市の現狀を詳說せるのみならず、著者特有の識者を以てこれを我國の都市に應用せんことを企圖せり。一面より見れば經世家の爲に社會問題、經濟問題、政治問題の解決を試みたる特種の參考書にして、他面より見れば國民の爲に新奇なる都市問題を紹介したる市民讀本なり

半井桃水著

新刊 小說 **子寶**

價郵六拾錢 送料八錢

愛あり熱あり眼へに情を以て寶とせる才子佳人を經とし血なく淚なく唯慾を以て寶とする神商世子を緯とし、產み出したる一双の子寶、月來つて世を弊しむべく、讀去つて人を訓ふべし

小川芋銳著

草汁漫畫

定價金六十錢 送料金八錢

古人曰文章拙を以て進み拙を以て成ると孚銳子の畫は則太拙なり其間ゆる妙想奇致なる者も則拙中の一味に過ぎず雅致の士冀くは一本を購ひて清賞を賜へ

田口掬汀氏著（濟方畫挿畫三枚）

說 **追恨**

定價金壹圓 郵稅拾貳錢

之れ著者半歲の勞苦を積みて成れる雄篇也、情艶に富める青年の男女を中心として、現代社會の缺陷を描く。靈活暢達の筆、心奧一幽を穿ち、人事の微を穿ちて、人と共に眼前に躍動す、著者が平生たる勢力を文壇に有する所以此書を讀みて知るを得べし裝釘の美を極らせる四百二十頁の大作、分壇に於て珍問滿くゝところの書二冊を超ゆ。

伊藤銀月著

小說 出潮

定價六十錢
郵稅十錢

時代を描き、時代の人を描き、時代の苦惱を描く。極めて眞摯に、極めて深刻に、且つ極めて巧妙に、文章亦平淡の裡に秀潤を包み、著者の或る面を最も遺憾無く發揮せり。之を讀む者必らず其血を沸かして、胸に新潮の昂げ來るを覺ゆべく、而も讀み了つて頭に何物かの殘れるを認め、恰然として獨り滿足せん。

伊藤銀月編

近刊 机上圖書館

一冊卅錢郵稅四錢或入三四五十錢十冊完結漸次刊行

本書は漸次に刊行して都合十冊に至りて完結すべきもの。男女老少何人にも好適書其師友たらんことを期す、完成の上は「机上圖書館」と表記したる雅致ある和に收めて座右に備ふべく、苟くも書籍に趣味と實益とを求めんとする時之を開かば各大各別の需要を滿たすべき原料を此中より見出すこと容易に實に坐ながらにして圖書館に入ると同一の結果を得ん、豈空前の有用書にあらずや。

伊藤銀月著　小杉未醒畫（挿繪十枚）

新刊 新譯水滸傳

定價八十五錢
送料金拾錢

水滸傳は支那の叛骨養成書にして革命經世風雲轉變の急にして革命の火氣大陸に肆殺する今日、本書の新に出でたるは物の如く時化の人に歡迎せらる、朝鮮より延いて支那にも我と混一視する抱負ある日本男兒は必ず之を讀むべしされど馬琴蘭山の舊譯は唯だ其皮相のみ銀月君が官文一致の新新なる譯文成りて原著却つて顏色を失ふを見る。未曾有の傑作と相俟つて現代第一の奇書！

旧口淵汀氏著（製本優美）

小說 獨木舟

定價金四十錢
郵稅金六錢

一枝の彩管を駕となして筠木に比ぶべき社會を刻せる獨木舟は千樣萬態の痕跡を印して、文海の潮に浮ばんとす。理性の閃めき感情の影、交互錯綜して究むるところを知らず。一痕に一痕の味あり、一跡に一跡の感あり、人情の活動に其深無限の教訓を聞かんとする者は必ず此書を讀まざる可からず、敢て江湖の清鑒を待つ。

獨逸哲學博士ドイセン原著　高橋五郎譯

近刊 古今東西 哲學通解

哲學は其範圍の廣大其問題の夥多其意義の深遠往々學者をして希望の叫聲を發せしむ。道を少數之を究むるや忽ち厭世悲觀に陷りて往々自殺に安心を求めんとす然れども之れ哲學の十分領會せられざるより生ずる弊なり茲に獨逸の哲學者ドイセン博士は哲學に於ては古今東西を窮め就中印度哲學の極奥を究め純正哲學美學及び倫理に三大別して詳密に哲學の大體を描寫し哲學の何物たるやは氏に至りて初めて萬人の領會する所となりぬ高橋先生該書を飜譯し數百年の哲學志望者を滿足せしめんとす

德田秋聲著（上製美本）

近刊 小說 母の血

定價七十錢
郵稅十錢

此篇題して「母の血」と云ふ。抑も何なる母の血なか享けたる。汚血か、遺血か、將た惡血か。著者の靈筆に描出されたる幾個の人物と共に此の一大雄篇は成れり。秋聲子が一年有餘の苦心に成れる新作は是なり。

綱島梁川譯（製本美）

新刊 ルナン耶蘇傳

定價一圓五十錢
郵稅十四錢

此書教主生涯、其生きし神の國の思想、天父の觀念を叙べ、奇跡を論ふ、他の宗教との關係を明にし、其國家觀社會主義觀また此間に四見す。自由研究の精神一貫して批評の銳刃觸れざる所なく、之が爲め一時歐米基督教界を震動して顏色失はしめたりと雖、世界史上に於ける耶蘇の位置は寧ろ之によりて確められたりと言ふべきなり。梁川先生は綱紀塊塊。現代獨步の筆を以て此書を飜して世に問はる。世界の認めて耶蘇傳の白眉となすものと模範的美本とは之によりて吾邦文壇に供へられむとする也

岩野泡鳴著

新刊 闇の盃盤

定價廿八錢
郵稅金六錢

未だ表象主義に迷ひ、自然主義に眩く者多し。此間に特立孤鳴して現代最近詩風を嘲弄する物は著者の作也。「闇の盃盤に盛りて我は底なき闇に沈む」と、此一句を解せんとする者は、乞ふ、一本を手にせよ。

大町桂月著（製本美）

刊 **代表日本人**

定價八拾錢
郵税金八錢

日本人を化せしは區々たる教旨にあらずして事實也、史也國體也祖先の教訓せる國民性、我が國には儒教、教以外一種の武士道ありて今日の發展を致したる事今更言を待たざる所なるが武士道の眞相を知らむとせば理論のみにては不十分也之を人物事實に徴せざるべからず此書日本國民の特性を發揮せる人、擇びて其面目を描き日本國民の前路に光明を與へ教訓を與ふ一風變はれる日本國民の歷史也然れて道德經也。

文學博士 桑木嚴翼著（總クロース製本美）

性格と哲學

價金四拾錢
郵税金十錢

本書は高妙なる哲學宗教の問題より卑近處世法迄に女子問題を解釋し其他戲曲文藝等廣大なる範圍に亘り政齊慎密なる評釋を下せるものにして論理の井然たる文章の精采なる眼に學界の珍書たるを失はず好學の士は本書の教訓に依り必らず啓發する所多きを信ず。

大町桂月序 有倫堂編纂

再版 **明治大家文集**

定價八十錢
郵税金十錢

明治の昭代文運の勃興前古其比を見ず、一々諸大家の著作を讀み其風格を知るは容易のものにあらず、この書論文といはず美文といはず小説といはず苟も文章を以て一家をなし特色を有せる文豪を撰びまた文豪の特色を發揮せる名篇を選び明治の文章家の集つめて此一書にあり之れ明治文學の縮圖にして、說の下に以て明治の諸大家の面影を伺ふべく文壇の一大偉觀たるを失はず文を學ぶ人にありては以て眞模範とするに足る有益にして且つ興味ある良書なり。

小栗風葉著 鏑木清方畫（上製美本）

樂版 **小説 十七八**

價金十五錢
郵税金十錢

櫻は三月盛りは十七八げに少女は人生の花なり而して少女の可憐なる心事と態度とは唯だ多情多恨の才子よく之を描き多情多恨の才子よく之を愛說す風流先生の波瀾萬丈を味はんと思はゝ大方の君子は請ふこの篇を讀まれよ。

綱島梁川著（菊版總クロース頁數約千頁）

四版 **梁川文集**

定價二圓廿五錢
郵税拾五錢

梁川綱島先生高邁博大の識見、精緻理到の言、恰も燭を把つて照すが如しとされと先生、眼理超れ能とする學者、非ず一面冷靜細緻の頭腦を備へたる篤學者にして他面別に抑ふ可らざる詩人の熱情を宿して天地を總ひ此理を洗へて日夜に瞑想し日暮に修養したまざる哲人也、格殺の人也、理を談すれば簡淨にして靈活感興を語れば深遠にして壓其想獨特、其文獨特、壓然一家を成して現代思想界の一角に拔く可らざる自家の師を占めて妄に他人の追從するを許さず是れ畢に非ずして人格なれば也弊常等に玉稿を請うて上梓するの榮を得たり敢て先生の高風を慕ふ所の諸君子に贈む。

海老名彈正先生著

三版 **基督教本義**

上製六拾錢
仲製五拾錢
郵税金八錢

基督教の本義果して如何之れが明白なる解答を與ふるしの古來宗教史上に光明を放てる偉官者教師教祖の抱懷せる思想經驗に依らざるはなし本書は基督教界の明星海老名彈正先生卓拔の識見健の筆を以て上はモーセより下はルーテル、シュライエルマッヘルに到る迄正確、偉人の悟得を明かにし新教の本義を說明せられたるものに愛讀の榮を賜へ。

文科大學講師 夏目先生校閲 上田先生序文 ロイド先生 チャールス、ラム著 文學士 小松武治譯

十版 **標註 沙翁物語集**

定價七拾錢
郵税金拾錢

本書は沙翁戲曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、ジュリエット及冬物語等迄じて十編の物語を拔萃し懇切なる註解を試み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附錄を以てす。特に文科大學講師先生の校閲を仰ぎたる者にして苟も沙翁戲曲の何たるやを覺ほんと欲するの士は須らく一本を購ふて座右に備ふべき也。

匿名隱士著

八版 **破天人論**

定價參拾錢
郵税金四錢

天下を風靡したる天人論に對つて活潑討議的に堂々駁論を試み三一哲學の宇宙觀と人生觀とを鼓吹したる肚快の書也本書の出づるや全國各新聞雜誌の大好評を博し今や第八版を發行せり以て本書が如何に愛讀せらるゝかを知るべし。

大町桂月著

十四版 わが筆　定價金四十五錢　郵稅金六錢

明眸の中に涙あり、放言の中に眞理あり教訓あり才氣あり霸氣あり或は洒脫に或は沈痛に或は眞面目に或は詼諧に短くして寸鐵人を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに一脈の氣と熱とを以てし行るに羅活の才筆を以てす家庭、校會社及び文學等に關する卓見到る處に充ち才情掬すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の活文字也

大町桂月先生選

八版 時代青年文集　定價金四十錢　郵稅金六錢

桂月先生最り青年を愛し指導教訓須臾も懈らず爰に滿天下青年の傑作數十篇中より其尤なる者を拔き最正なる批評を加へて時代青年文集を編せらる收むる所叙述抒情あり論說警闢あり將た新體詩あり成な詞調花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を慰すべく元氣を鼓舞すべし附錄には當代諸大家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

大町桂月著

六版 家庭と學生　定價金參拾八錢　郵稅金六錢

著者申す、我れに三男一女あり其れを斯くはしつけむ、我れも斯くは修悟せむと心に期するのみにて能く實行せむと斷言し得べき身の上なられど家庭教育の大切なることを今更のやうに感じて感者の一得もやどの世の青年の男女の前に呈し合して世の父兄の前にも呈する也

大町桂月著

八版 我が文章　定價金四十八錢　郵稅金六錢

桂月先生の文章愈々熟して縱橫自在眞情流露し行く處に行き止る處に止まり些の街ふ所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り西落飄逸に快闊にして男性的意氣を發揮し而かも百外に情熱溢る文此に至れば聖なり先生の文の如きは、當代の逸品なり

大町桂月先生　中內蝶二先生合著

六版 少女と山水　定價卅五錢　郵稅金六錢

大町桂月先生序　角金潮聲著

五版 宇宙と人生　價貳拾五錢　郵稅金四錢

景山英著

四版 妾の半生涯　定價金三拾五錢　郵稅金六錢

川上眉山著○清方畫（上製美本）

三版 觀音岩　前編　定價八拾錢　郵稅金拾錢

川上眉山著（頁數三百卅頁上製頗ル美本）

再版 觀音岩　後編　定價八拾錢　郵稅金拾錢

凡鳥山人著

再版 馬鹿物語　定價四拾錢　郵稅金參錢

田岡嶺雲著

新刊 霹靂鞭　價四拾五錢　郵稅金六錢

田口掬汀氏著

再版 悲劇 熱血　定價三拾錢　郵稅金六錢

小栗風葉著（美術的製本）

小說 新粧　價四拾五錢　郵稅金六錢

大町桂月　伊藤銀月刪修天籟篇

再版 文士寶典　定價五拾錢　郵稅金六錢

櫻庭篁村著○清方畫（上製美本）

再版 小說 **竹影集** 定價金六拾五錢 郵稅金拾錢

伊藤銀月著

再版 社會研究 **高原生活** 定價四拾錢 郵稅金六錢

文學士 久保天隨著

文壇獅子吼 定價金四拾五錢 郵稅金六錢

泉鏡花著○清方畫（上製美本）

再版 小說 **無憂樹** 定價金八拾五錢 郵稅金拾錢

文學士 久保天隨著

紀行文集 **山水寫生** 定價金四拾五錢 郵稅金六錢

櫻庭篁村著○鏑木清方畫（上製美本）

三版 小說 **不問語** 附 大詩人出現 鹽原遊記 定價金七十五錢 郵稅金十錢

齊木仙醉對佛國神學教授ポア博士

三位一體論 定價貳拾錢 郵稅金四錢

高橋五郎著

英語實驗百話 定價參拾錢 郵稅金六錢

姉崎博士序 萬朝報記者茅原華山著

改冊五版 **向上の一路** 定價三十錢 郵稅金六錢

大町桂月先生撰

第貳 **時代青年文集** 定價四十錢 郵稅金六錢

海老名彈正先生著

人道 定價金拾錢 郵稅金二錢

ヂヨサイア、スツロング原著 石川三四郎譯

二十世紀の大覺醒 定價三拾錢 郵稅金四錢

文學士 久保天隨著

再版 美文韻文 **夕紅葉** 定價金三拾五錢 郵稅金六錢

櫻庭篁村著

再版 紀行文集 **天下泰平** 定價金四拾五錢 郵稅金六錢

德田秋聲著

小說 **花たば** 定價金四拾五錢 郵稅金六錢

牢井桃水著 清方畫

再版 小說 **慰問袋** 定價金七拾五錢 郵稅金拾錢

醫學士 佐藤得齋著

美的衛生 定價金四拾錢 郵稅金六錢

醫學士 佐々木多聞著

再版 **新化粧** 價金四拾錢 郵稅金六錢

本居豐穎撰

紫文摘英 定價卅五錢 郵稅金四錢

海老名彈正著

宗教々育觀 定價金五拾五錢 郵稅金八錢

萬朝報記者　茅原華山編纂

青年と詩吟　定價三拾五錢　郵税金四錢

泉鏡花著○清方畫

再版　小説　**誓之卷**　定價金七拾五錢　郵税金拾錢

日高有倫堂編

基督教講壇集　定價七拾錢　郵税金六錢

茅原華山編纂

我と人　定價貳拾錢　郵税金六錢

泉鏡花著

小説　**ななもと櫻**　定價四拾錢　郵税金六錢

鈴木秋子女史著

再版　**軍國の婦人**　定價廿八錢　郵税金四錢

苦學社編輯

苦學の伴侶　定價三拾錢　郵税金四錢

横山雄助著

再版　成功したる催眠暗示術　**應用自在**　定價參拾錢　郵税金四錢

山口先生序　シルレル原著　齊木仙醉譯

接神術　定價廿貳錢　郵税金四錢

杉山先生書簡　黒澤辰三郎編

日本　**名家手簡**　定價參拾錢　郵税金六錢

齊木仙醉先生譯

トルストイ教訓小説集　定價參拾錢　郵税金四錢

加藤直士譯

トルストイの　**日露戰爭觀**　定價參拾錢　郵税金四錢

高橋五郎著

杜伯品藻　トルストイ伯の主義人物を評す　價參拾五錢　郵税金六錢

廬風秋元喜久雄譯

四版　獨逸詩粹　**紛紅集**　定價廿五錢　郵税四錢

文學士　小原無絃譯

原文對照　**バーンスの詩**　定價三拾錢　郵税金四錢

文學士　小原無絃譯

原文對照　**シェレーの詩**　定價金三拾五錢　郵税金四錢

泡鳴著

新體詩集　**悲戀悲歌**　定價廿五錢　郵税四錢

泡鳴著

新體詩集　**夕潮**　定價廿五錢　郵税六錢

細越夏村著

新體詩集　**靈笛**　定價三拾錢　郵税四錢

秋元廬風譯

獨詩　**野葡萄**　定價廿五錢　郵税金六錢

○原文對照○卷末に評註を附す

257
628

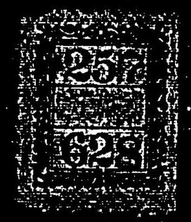
093130-000-8

特12-836

女

小栗　風葉

小川　煙水／著

M41

DBQ-0471